

会議名	日本畜産学会第106回大会
開催日時	平成18年3月28日午後—3月31日午後
開催場所	九州大学六本松キャンパス
主催者	日本畜産学会
参加人数(概数)	約1000名
1. 会議の概要	<p>総会・授賞式・受賞者講演、シンポジウム（3企画）・一般講演（11の会場で）・優秀発表賞応募講演（4つの会場でポスター発表）・特別講演・関連学会・研究集会（計16）という盛り沢山の大会であった。その中で主として繁殖・生殖工学に関する技術情報の収集を行った。計93題の研究発表のうち、材料として牛・豚・鶏・山羊・実験小動物を対象としたものがそれぞれ44%、32%、5%、2%、18%であった。また、生殖細胞や初期胚を研究材料としたものが約6割であった。帯畜大の宮本明夫教授のグループは高泌乳牛群の乳生産・繁殖・栄養の関係について解析し、分娩後3週以内の早期初回排卵はピーク乳量の低い個体で起こり、エネルギー充足率や肝機能が受ける負担の度合いの違いが排卵の有無に反映されること、この初回排卵を左右する栄養代謝要因の差はその後の飼料給与の工夫によって改善され、分娩後100日までの受胎率に差は認められないこと、分娩後50日以降の栄養状態が良好であればPGでの発情同期化処置とAIによって70日以内の受胎率64%の成績を得たこと、などを報告した。さらに長期不受胎で過肥の黒毛和種雌牛に対する飼料給与制限と強制運動が受胎能力の回復に有効であることを実証した。牛の受胎率低下が問題視されるが、単に繁殖面から捉えず、栄養との関係を追究した本格的畜産研究といえる。平山博樹氏ら（道立畜試ほか）はLAMP法による雄特異的DNA検出技術が白血球の性染色体キメラ分析にも応用でき、フリーマーチンの迅速診断が可能なことを報告した。山口昇一郎氏ら（福岡農総試ほか）は豚凍結精液の融解液にカフェインを含むBCC液を用いても、生体内のアデノシンにより自発的な先体反応が抑制され、繁殖成績が向上することや、eCGとhCGの合剤投与後72時間後にhCGを投与し、その40時間後に1回授精して分娩率67%の成績を得た。ただし60++以上の高活力精液、総精子数25億を注入している。雄個体差や季節的変動の問題は克服されていない。</p> <p>生殖工学関連では、卵子の成熟・受精・胚発生・凍結保存・クローン・遺伝子導入などの研究が多数報告された。豚卵子の体外受精では多精子受精の抑制法が問題となっている。N-アセチル-D-グルコサミン（林 武司氏ら）、タンニン関連化合物類（渡慶次 功氏ら）、カフェイン（高宮義博氏ら）の培地への添加によってある程度の効果があることが報告されたが、完全な制御法とはいえない。正常な受精卵がその後の胚発生の検討に不可欠であり、その技術確立が望まれる。体細胞クローン豚の作出成功例が報告されたが、効率はまだ低く、トピックス段階にあると言えよう。クローン胚の作出条件、胚移植の条件などより一層の検討が必要である。</p> <p>阪谷美樹氏ら（九沖農研）は、培地へのβ-Mercaptoethanol添加は暑熱感作した牛体外受精胚の発生率改善に有効なことを報告した。浅田正嗣氏ら（家畜改良セ）は、日本短角種のOPU-IVF成績の向上にFSHの前投与が有効なことを報告した。また、富永敬一郎氏ら（兵庫農総セほか）は閉鎖型ゲル・ローディング・チップ・ガラス化保存法を考案し、牛体外受精胚の保存に有効なことを報告した。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>「肉用牛の現状と展望」と題するシンポジウムでは5人のシンポジストの話題提供があった。北里大学の萬田富治教授は、肉用牛における放牧普及の問題点を明らかにし、日本短角種とサラ一種の交雑種を作出し、八雲牧場での放牧と貯蔵自給飼料主体で放牧肥育し、日増体量0.8kgでその肉の共役リノール酸含量が黒毛和種の3倍であること、消費者と直結した販売・流通ルートを当面構築したことなどを紹介した。放牧が中山間農業の切り札とされているが、その振興は国民的課題であることが力説され、大変感銘を受けた。九州大学の後藤貴文助教授は、肉用牛の初期成長期に草からの栄養吸収力を高める体質づくりを目指し、耕作放棄地や荒廃草原での放牧により安全で高品質な牛肉の生産技術を開発しようとしていることを紹介した、今後の研究展開に期待したい。畜草研の甫立京子氏は、肥育牛のビタミンAの制御により、飼料摂取量と枝肉中脂肪量の減少を起こすが、赤肉中の脂肪量は増加できること、今後は肥育中のビタミンC低下の影響を調査するべきだと指摘した。また、黒毛和種肥育牛の赤肉中平均脂肪含量は19%以上で、これ以上の脂肪交雑を求めることは不要とみられる。東北大学の佐藤衆介教授は、動物福祉研究が理論から実践に展開中であること、EUでは戦略的に取り組まれていることなどを商會した。家畜改良セの河村正氏は、昨年3月刊行された食肉の官能評価ガイドラインの概要とポイントについて紹介した。今後は実験として信頼できるデータを取り、これを育種改良に活かし、生産と消費を直結させるための資料として活用することであった。いずれの話題もスケールの大きな内容で肉用牛生産の今後を考える良い機会であった。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>アンデスのラクダ科動物の利用：リヤマ・アルパカ牧畜と野生動物ビクーニャの合理的利用「チャク」と題する愛知県立大稲村哲也氏の講演を拝聴した。文化人類学者としてペルー現地調査の結果を紹介された。標高3700m以上の高地でリヤマ・アルパカの牧畜が営まれ、移牧をせず、定定的で搾乳をしないこと、雨期に出産するが病気を避けるため牧区を変えること、最高質の動物繊維を産するビクーニャは絶滅の危機から脱し、インカ時代のチャクと呼ばれた捕獲の方法が現代に蘇ったこと、また大きな現金収入源となるため各地域で囲い込みが行われ始めたこと、人に馴れ易く高原で固定テリトリーを持つことから、家畜化も可能であることなどが紹介された。ただし、その生態学的特性から日本への導入は困難であると感じた。より低地では農業が営まれ、物々交換とリヤマによる農畜産物の輸送で相互に協力している。ジャガイモは数千品種もあり、作物の多様性に富んでいる。自然のゆるやかで多様な管理と利用は資本主義の競争原理とは別の価値を持っていると感じた。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>マクロな研究とミクロな研究それぞれに意義のあるものを多様性を持たせて採択するしかない。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>4日間の会議はさすがに長過ぎると感じた。それでも専門分野以外の話題を聞くには良い機会であった。</p>